

# 直感的理解を重視した文化財展示の実践

—飛鳥資料館特別展の展示から—

## 1 『文化財を撮る—写真が遺す歴史』

現代、写真は多くの人々にとって身近な媒体であり、誰もが気軽に写真を撮影している。しかし、文化財写真は、一般には馴染みの薄い分野であり、文化財の保存活用のためには、文化財写真専門の技師の存在が重要だという状況もあまり知られていないのが実情である。

そこで本展では、文化財写真を見せるだけではなく、来館者にその技術を体感してもらうことで、文化財写真の仕事の意義を来館者に伝えることを強く意識した。

展示にあたっては、大きく3つのテーマを設定した。「1. 文化財写真の価値」は、文化財を写真で記録することの重要性と、文化財写真自体がもつ価値を伝えることを意図した。限られた展示面積のため、文化財に指定・登録された写真資料の中から、現代の文化財写真と近い性格をもつ、歴史的・伝統的な事物・事象の写真を紹介した。作品は、多くの人に馴染みがある著名な文化財や、飛鳥地域ならではの文化財を撮影した古写真を選んだ。既知の文化財のかつての姿を示すことで来館者の興味をひきつけ、現代と異なる様相への気づきをうながし、写真で記録することの重要性を理解してもらうためである。さらに、このテーマ設定には、奈良文化財研究所の文化財写真が、写真史や文化財保存の歴史など、社会全体の流れの中で意味づけされることを示す意図もあった。

表3 「文化財写真の技術」のコーナー一覧

タイトル	内 容
観察！ 影の出かた	朝・昼・夕方の太陽光にみたてた照明を切り替えて、影の出かたによる遺跡の立体感や質感の見え方の違いを観察する。(遺構の記録のために逆光や半逆光で撮影する大切さを知る。)
撮影！ 遺跡の出土品	出土品に、4方向からの照明を個別に点灯・消灯して、表面の質感や立体感の見え方の違いを観察・撮影する。発掘現場で使用していたフィルムカメラを触って、シャッター音やフィルムを巻く音・手応えなどを体感する。(出土品の撮影における照明の大切さを示す。)
挑戦！ 色あわせ	色味が偏った写真と正確な写真をパソコンのモニターに並べて表示し、来館者は6色のフィルターの中から正確な色味に調整できるフィルターを選ぶ。(色の正確な記録の重要性と、補色の関係を知る。)
文化財写真の 合格・不合格	「ねむい」「とぶ」などの写真用語が書かれたパネルをめくり、文化財写真としては不合格な「ねむい写真」や「とんだ写真」を見る。文化財の形や質感が正確に表現された「合格」写真を示し、両者を見比べる。(芸術写真とは異なる文化財写真の表現を視覚的に理解する。)



図23 『文化財を撮る』展示会場のようす

「2. 飛鳥の遺跡を撮る」では、奈文研の写真史の記録化と、あまり知られていない写真の公開を目指した。設立当初の奈文研には専門の写真技師がおらず、草創期の写真撮影の様子は、一部が発掘史の中で語られるのみだった。そこで、今回は聞き調査した内容を図録にまとめ、記録として残した。また、これまで刊行物であまり公開されていない写真も、積極的に展示した。飛鳥寺跡や川原寺跡のカラー写真がその一例である。また、和田廃寺出土の大甕と幼児が並ぶ写真も、40年越しの初披露となった。定番以外の写真を紹介することで、飛鳥の遺跡の魅力の奥深さを伝えられた。

「3. 文化財写真の技術」では、芸術写真とは異なる、文化財写真ならではの表現の特徴を示した。この展示では、4カ所のコーナーを設け(表3)、来館者がボタンやレバーを操作し、視覚・聴覚・触覚などの直感で感じ取ることを重視した。光の当て方による立体感や質感の見え方の違いや、カラーフィルターによる色味の変化などを、言葉による説明を通してではなく、直感で理解してもらうことを意図したのである。この結果、文化財や写真への関心が浅い来館者に対しても「機材操作」や「観察」などを通じて、展示への興味を引き出す展示となかった。さらに深い理解を求める来館者に向けては、タブレット端末などで詳しい解説を示して対応した。

これら3つのテーマのほかに、文化財の調査に使用したカメラ、飛鳥・藤原地域の航空写真、飛鳥資料館の過去の展示のポスターを紹介するコーナーも設けた。

今回の展示は、作品を並べるだけでなく、来館者自身の行為—機材操作、直感による理解—を重視した、近年の飛鳥資料館の特別展の中では異色の展示だった。遺物がほとんど出品されず、写真と手作りの装置が並ぶ展示に戸惑いもあったのか、展示室では両手を後ろに組んだまま、写真パネルだけを見る年配者の姿もあった。一方、写真パネルはざっと眺めて、カメラ操作や照明の調整に夢中になる児童の姿も見られた。来館者の年代や興味関心による行動パターンの違いが興味深かったが、3つのテーマの展示手法の違いにより、多様な観覧スタイルに



図24 撮影！遺跡の出土品コーナー

対応できたようである。アンケートでも、よかったですと思うテーマ（複数回答可）は、1部が24.7%、2部が17.6%、3部が36.4%と、いずれも一定の評価を得た。展示の総合評価では、「良い」「まあまあ良い」を合計した肯定的な回答が81.2%と、通常の特別展に比べ高い数値だった。当館としては異色の展示手法も、来館者に好意的に受け止められたようだ。

（西田紀子）

**タブレット端末の活用** 会場では、iPadを2ヵ所で活用した。「1. 文化財写真の価値」では、展示品以外の文化財写真を資料群ごとにまとめ、閲覧できるようにした。これにより、省スペースかつ多くの資料を公開できた。また、「撮影！遺跡の出土品」では、照明パターンが16通りにもおよぶため、「資料写真」、「ポスター用写真」、「トップと左右のライト」の3パターンの撮影例を提示して、文化財写真の視点からの長所・短所を比較できるようにした。説明パネルを最小限にして、来館者の操作の自由度を保ちつつ、文化財写真の視点を伝えるための工夫として導入した。端末の操作方法のガイドもつけたが、操作する来館者はスマートフォンやタブレット端末を利用する世代が中心だった。来館者に伝えたいメッセージを階層化して、パネルとタブレット端末を使い分ける重要性を感じた。

（小沼美結）

**体験イベント** 展示期間中には、写真室の協力を得て「なりきりカメラマン—文化財写真技師の仕事体験」を開催した。参加者は、4×5カメラなどの機材操作を体験した後、文化財の複製品の立面写真と俯瞰写真を撮影した。撮影時には参加者自身が意図する表現をめざして、照明の位置や照度を写真技師とともに工夫し、シャッターを切った。多くの参加者は他の参加者が撮影している間も、照明による表現の変化を興味深そうに見たり、互いの表現にコメントしあったりしていた。また撮影した文化財に関する文献などを待ち時間に閲覧できるコーナーも設け、文化財への関心を高められるように工夫した。アンケートでは参加者全員が肯定的な評価で、「文化財写真の奥深さがよくわかった」「独自に工夫されたノウハウがわかってよかった」などの声がよせられた。



図25 『祈りをこめた小塔』（作品と垂れ幕を連続させた演出）

## 2 『祈りをこめた小塔』

本展では、奈文研が新たに収藏した百万塔の公開を柱に、百万塔と銭弘俶塔、泥塔を展示した。筆者には、決定された出品作品から展示をつくる機会となった。

小塔にこめられた祈りを表すため、デザイナーから、展示会場に入る来館者が、意図せずとも頭を垂れた「祈り」の姿勢となる「垂れ幕」を使うアイデアが出された。そこで、解説パネルは最小限にして、この垂れ幕を活かして、小塔の性格を直感的に理解できるように工夫した。小塔は、一度に多くの塔が造立されたことと、経典を重視した「法舍利塔」の性格をもつことが特徴である。そこで、百万塔・銭弘俶塔・泥塔の写真を、それぞれ多数並べ、展示品からの連続感を出して、数の多さをイメージさせた。また、小塔に関する経典の写真を、各塔の写真と並べて配置し、経典の字面を見せて、法舍利塔の性格をアピールした。これにより小塔にこめられた祈りと、小塔の歴史的な特徴を体感できる展示となった。

また歴史に馴染みのない来館者の関心を引き出すため、解説シートを作成した。解説シートでは「でいとうさん」などのお父さんキャラクターが、各塔の特徴を、作品が伝世・出土した地域の方言で解説した。

アンケートでは、肯定的な総合評価は75.8%だった。「もう少し大規模だと思っていた」という意見もあり、この分野への高い関心がうかがえた。垂れ幕のグラフィックは「百万塔が多く並んでいるイメージができた」「内容がわかりやすい」など、印象に残ったようだ。一方で「内容や意図は理解不能」という意見もあり、解説パネルを控えめにした展示の弱さも指摘された。

## 3 おわりに

今年度の特別展では、作品と解説を並べるだけではなく、世代も予備知識も様々な来館者が、作品と出会い、その内容を容易に認識できる展示づくりを意識した。今後も当館が文化財と飛鳥の歴史の多様な学びの場となるよう、積極的な展示活動に取り組んでいきたい。（西田）